

「かいろす」第59号別冊

令和3年10月27日発行

『ミツバチ・マーヤの冒険』における
「ミツバチとスズメバチの戦い」について
—戦争とベストセラーのかかわりに関する一考察—

竹 岡 健 一
(Ken-ichi TAKEOKA)

(Kairos 59)

Kairos-Gesellschaft für Germanistik

Fukuoka Japan 2021

『ミツバチ・マーヤの冒険』における 「ミツバチとスズメバチの戦い」について

— 戦争とベストセラーのかかわりに関する一考察 —

竹 岡 健 一

1. はじめに

古代より戦争は文学の主たるテーマの一つであり、第一次世界大戦からも多くの文学作品が生まれたが、¹⁾ ベストセラーという観点から見たときまず思い浮かぶのは、エーリヒ・マリーア・レマルクの『西部戦線異状なし』であろう。戦争の悲惨さを描いたこの作品は、1929年の刊行後空前のヒット作となり、翌年には早くも100万部を突破した。²⁾ 他方、国家主義的な立場から戦争の英雄性を描いた作品の中にも、ベストセラーとみなされる作品が少なくない。同じく1929年に刊行され、1931年までに13万部に達したヴェルナー・ボイメルブルクの『ドイツを取り巻く弾幕』は、その一例である。³⁾

さて、本稿では、ヴァルデマル・ボンゼルススの『ミツバチ・マーヤの冒険』を対象として、戦争とベストセラーのかかわりを考察する。だが、1912年という刊行年から明らかなごとく、本作品は、上記の二作品のように戦争体験から生まれた文学ではない。すなわち、ここで問題となるのは、既刊のある文学作品が第一次世界大戦を契機として需要の急増をみたという特異な事例である。そこにはいったいどのような理由があったのだろうか。

2. 需要の急増と前線兵士の読書

1990年までの総刊行数が200万部に達する『ミツバチ・マーヤの冒険』がベストセラーでありロングセラーでもあることは、言を俟たない。⁴⁾ この間、本作品は、1915年から1940年の間に最もよく売れた本のリストにおいて、第1位の『ブッデンブローック家の人々』（トーマス・マン）、第2位の『クルツ・マラー』（アルフ

* 本稿は JSPS 科研費 JP20K00500 の助成を受けた研究成果の一部である。また、本稿の内容については、日本独文学会春季研究発表会（2021年6月6日 Zoom 開催）において口頭発表を行った。

1) 畠山寛／吉中俊貴／岡本和子編著『ドイツ文学の道しるべ——ニーベルンゲンから多和田葉子まで』（ミネルヴァ書房）2021年、189～192頁参照。

2) Vgl. Kornelia Vogt-Praclik: Bestseller in der Weimarer Republik 1925-1930. Eine Untersuchung. Herzberg: Verlag Traugott Bautz 1987, S. 49.

3) Vgl. ebenda, S. 62.

レート・ハイン)、第3位の『西部戦線異状なし』に次ぐ第4位(79万部)を占めており、⁵⁾ また1933年から1944年までのナチス時代の12年間だけでも、刊行数はおよそ15万5千部に達して、当時のベストセラーの上位に位置しているのである。⁶⁾ しかしながら、このような『ミツパチ・マーヤの冒険』も、発売当初から高い販売部数を記録したわけではない。1916年までの5年間の刊行数は1万2千部と見積もられ、⁷⁾ 平均すると年間2千4百部に留まっているのである。こうした状況に変化が訪れるのは1917年であり、その年の刊行数は1万部と、それまでの約4倍となった。⁸⁾ そして翌1918年の刊行数は一気に7万7千部にまで上昇し、前年と比べても8倍近くに跳ね上がったのである。⁹⁾ 1917年から1918年といえは第一次世界大戦末期にあたるが、本作品はこの時期に大きく需要を伸ばし、ベストセラーの仲間入りをしたのである。

では、その理由は何だったのであろう。その謎を解く鍵の一つは、著者であるボンゼルス自身によって与えられている。彼は、1933年2月5日に、『デア・ヴェステン』紙のインタビューで、次のように述べているのである。

私の出版社は、「ミツパチ・マーヤの冒険」の残部を野戦文庫に送りました。そこで、軍の紙に印刷された見栄えのしない本が、間もなく「ヒット」したのです。その本は、前線から故郷へと戻ってきました。——そして大「成功」したのです。¹⁰⁾

第一次世界大戦中のドイツでは、前線兵士の読書の欲求を満たすため、戦地に設けられた書店で本が販売されたり、「野戦文庫」のような形でまとめて寄贈されたりしたが、¹¹⁾ ボンゼルスの言から察するところ、『ミツパチ・マーヤの冒険』の場合、出版社が在庫の一部を野戦文庫として寄贈し、それらが前線兵士の間で好評を博したことが、その後のドイツ国内での人気の高まりへとつながったものと

4) Vgl. Harald Weiß: Der Flug der Biene Maja durch die Welt der Medien: Buch, Film, Hörspiel und Zeichentrickserie. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 2012, S. 147. なお、ここには、本作品を元に制作された絵本や外国語への翻訳などは含まれていない。

5) Vgl. ebenda, S. 141.

6) Vgl. Christian Adam: Lesen unter Hitler. Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich. Berlin: Galiani 2010, S. 219, 325.

7) Vgl. Harald Weiß: A. a. O., S. 147.

8) Vgl. ebenda.

9) Vgl. ebenda.

10) Zitiert nach ebenda, S. 143.

11) 戸叶勝也『ドイツ出版の社会史——グーテンベルクから現代まで』(三修社)1992年、210～212頁参照。

思われる。また、このように、第一次世界大戦中に本作品が前線兵士によって愛読されたことを裏づける証言として、『ヴァルデマル・ボンゼルス ドイツの詩人』(1941年)の著者ラインホルト・ブルグリンの次のような回想もあげることができる。

世界を焼く劫火が本当に燃え上がったとき、「ミツパチ・マーヤ」は、「ファウスト」や「ツァラトゥストラ」と並んで、前線兵士が最も好んで背囊に入れる本であり、西部戦線の戦いの轟音の中でさえ生存権を主張したのであった。¹²⁾

もっとも、この説明は、もともと本作品を愛読していた兵士が出征時に本を携えて行つたと読むこともできるため、ボンゼルスの見解と厳密に一致するわけではない。だが、それは矛盾とみなすよりも、野戦文庫と並んで、個々の兵士によって前線へもたらされた本もまた、やがて兵士らの間でこの作品の人气が高まる一因となったと考えたほうがよいであろう。そのほかに、本書は著者ボンゼルスの母親の仲介で皇帝ヴィルヘルム2世に近い人々の知るところとなり、感銘を受けた宮廷の有力な婦人らが普及のために配慮した結果、「数千人のドイツ兵が『ミツパチ・マーヤの冒険』を背囊に入れて前線へ赴く」¹³⁾ ことになったとの指摘もあるが、事実であれば、それもまた前二者と並ぶもう一つの契機と捉えるべきであろう。ボンゼルスが言うように、最も大きな影響を及ぼしたのは野戦文庫だったのかも知れないが、それだけを唯一の契機とするよりも、他のきっかけとの相乗効果によるものと考えの方が現実的だと思われる。いずれにしても、重要なことは、これらの指摘から推察して、1917年から1918年にかけての本書の需要の急増の原因が、主に前線兵士の読書にあったと考えられることである。

3. 愛国主義的解釈の可能性

さて、それでは、本作品はいったいどのような理由で前線兵士の間で人気を博したのであるのか。その点については、残念ながら具体的な証言は残されていない。したがって、本作品の何が前線兵士に感銘を与えたのか、彼らは本作品をどのように読んだのか、ということについては、現状では、前線兵士の立場に立つて推し量る以外に手段はないが、そのさい、従来最も有力な要因とみなされてい

12) Reinhold Bulgrin: Waldemar Bonsels. Ein deutscher Dichter. Berlin: West-Ost-Verlag 1941, S. 68. Zitiert nach Harald Weiß: A. a. O., S. 143.

13) Dietmar Grieser: Im Tiergarten der Weltliteratur: Auf den Spuren von Kater Murr, Biene Maja, Bambi, Möve Jonathan und den anderen. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1991, S. 164. Zitiert nach ebenda, S. 144.

るのは、本作品の愛国主義的な側面である。そこで、まずはこの点について、「ミツバチとスズメバチの戦い」に焦点をあてて、三つの観点から詳しく掘り下げてみたい。

第一は、ミツバチの女王ヘレネ8世に皇帝ヴィルヘルム2世が投影されていると考えられることである。このことは、女王の言葉と皇帝の「フン族演説」との類似に顕著に表れている。¹⁴⁾ 1899年から1900年にかけて、中国北部、とりわけ山東省では、ドイツの支配下で従来の農村経済体制が破壊され、農民、手工業者、商人、運送労働者などの破産・失業が深刻化したことにより、反帝国主義的な運動が盛んになった。1900年6月に北京に入城した義和団は、北京市全体を支配下において外国の公使館区域を包囲し、日本外務省の書記とドイツ公使を殺害した。これに対して、ドイツ、イギリス、アメリカ、フランス、ロシア、日本、イタリア、オーストリアの8カ国からなる連合軍が北京解放を目的として進撃すると、清朝は宣戦を布告し、国際的な戦争となったが、8月には連合軍が北京を占領して、義和団を鎮圧した。翌1901年9月に調印された最終議定書では、清国は多額の賠償金、北京・山海関沿線での外国の駐兵権、ならびに人民の反帝国主義運動の鎮圧を義務づけられた。このような義和団事件の経過の中で、ドイツ公使の殺害に報復するために派遣されるドイツ遠征軍に対して、ヴィルヘルム2世は、1900年7月27日にブレーマーハーフェンで演説を行い、かつてフン族がヨーロッパを侵略したとき、ヨーロッパ諸国民をひどく恐れさせたように、ドイツ遠征軍は中国人に対して厳しい姿勢をとるようにと熱心に説き勧めた。

諸君は装備を固めた軍隊を相手に戦わねばならぬ。復讐をするのだ。たった一人の公使の死に対してではなく、数多くのドイツ人とヨーロッパ人の死に対して。敵を前にしたら、打ち破れ。情け容赦は無用。捕虜にしてはならぬ。諸君の手に落ちた敵は、意のままに始末するがよい。千年前アッティラ王に率いられて名をなしたフン族は、今なお伝承の中にその恐るべき姿を残している。それと同じように、ドイツの名を中国で知らせ、中国人が二度とドイツ人を軽蔑的な目つきで見ることがないようにするのだ。¹⁵⁾

この演説は本来即席のもので、原稿は存在しないが、外交政策におけるヴィルヘルム2世の無分別な発言や衝動的な行動を制御するため、当時ドイツ帝国の外

14) 「フン族演説」については、次の文献を参考にした。リチャード・ジッブル「ヴィルヘルム2世の対東アジア外交におけるヨーロッパ観についての一考察」(「南山大学ヨーロッパ研究センター報」第7巻、2001年、47～66頁)；川島隆「カフカの〈中国〉と同時代言説——黄禍・ユダヤ人・男性同盟」(彰流社)2010年、28～35頁。

務大臣を務めていたベルンハルト・フォン・ビューローと新聞記者の取り決めによって、政府による校訂の後に公式文書として発表されることになっていた。そのため、公式文書においては、上記の引用箇所は割愛されている。にもかかわらず、演説を聞いた新聞記者が内容をまとめてプレーメンの「ヴェーザー新聞」と「ヴィルヘルムスハーフェン日刊新聞」に掲載し、その記事が、ヴォルフ通信社のプレーメン支部を通じてドイツと海外の新聞に引用された。その結果、皇帝の演説は、その最も煽情的な箇所にちなんで「フン族演説」と呼ばれて大きな話題となり、政治的論争も引き起こした。例えば、中央党や社会民主党、および自由主義左派新聞では、「情け容赦は無用」という発言が非人道的なものとして批判されたのに対し、保守派と自由派の一部の新聞では、近代的な法律制度が認められない国に対してはこのような強硬な姿勢が必要であろうとみなされた。さらに、この発言は、時を経て第一次世界大戦中の反ドイツ宣伝において、ドイツ軍が「フン族」にたとえられて軽蔑される契機ともなったのであった。

このように大きな影響を及ぼしたヴィルヘルム2世の「フン族演説」が『ミツバチ・マーヤの冒険』において想起されるのは、敗戦を悟ったスズメバチの指揮官がミツバチに使者を送り、「〈とじこめられたものをひきわたしてくれるなら、われわれはひきあげ、彼らの巣箱を永久におそわない〉」(170)¹⁶⁾と伝えさせたのに対して、女王が次のように答えるくだりである。

「われわれミツバチは、貴軍がひきとりたいなら死者をひきわたす。捕虜になったものはおらぬ。侵入した貴軍の兵はことごとく戦死した。二度とおそってこない、という貴軍の約束をわれわれは信じぬ。いつなりとまたくるがよい。きょうよりもましなめにあうことはなかるう。貴軍がなおいくさをつづけることを欲するなら、われわれは、最後の一人まで戦うかくごができてゐるのだ。」(170)

15) Bernd Sösemann: Die sog. Hunnenrede Wilhelms II. Textkritische und interpretatorische Bemerkungen zur Ansprache des Kaisers vom 27. Juli 1900 in Bremerhaven. In: Historische Zeitschrift, Bd. 222 (1976) H. 2, S. 342-358, hier S. 350. ここでの引用は、当初の新聞報道に基づいてゼーゼマンによって再構成された皇帝の演説の完全版に依拠している。なお、訳出にあたっては、リチャード・ジッブル、上掲論文、56頁、および川島隆、上掲書、32頁を参考にした。

16) Waldemar Bonsels: Die Biene Maja und ihre Abenteuer. Berlin und Leipzig: Schuster & Loeffler 1918, S. 170. 以下、本書からの引用については、引用直後に頁数のみ記す。なお、本稿では、1918年における刊行数の急上昇を考慮し、同年の版(第23～36版)を底本とする。訳出にあたっては、ウルデマル・ボンゼルス(高橋健二訳)『みつばちマーヤの冒険』(国土社)2004年、およびW・ボンゼルス(生野幸吉訳)『みつばちマーヤの冒険』(『少年少女世界の文学19 アルプスの山の少女 みつばちマーヤの冒険』[河出書房新社]1967年、237～329頁)を参考にした。

ここで注目すべきは、「〈捕虜になったものはおらぬ〉」(Gefangene sind nicht gemacht) というヘレネ 8 世の言葉が、「捕虜にしてはならぬ」(Gefangene nicht gemacht) というヴィルヘルム 2 世の言葉を意識した表現だと考えられる可能性があることである。¹⁷⁾ されどころか、カスパー・マーゼによれば、女王の言葉は「誤解の余地なく」¹⁸⁾ 皇帝の「フン族演説」の引用であり、敵対的なスズメバチがミツバチの巣を襲う場面は、「皇帝と祖国のための戦いと死の比類なき礼賛」¹⁹⁾ をなしている。「〈永遠の正義の名において、女王の名において、王国を守れ!〉」(166) という命令は、「ここで問題となっているのが現代のドイツ帝国であり、ミツバチの女王がその皇帝である」²⁰⁾ ことを、読者に対してははっきりと示しているのである。実際、ミツバチの数千の国民の中に女王とみなの幸福ために「〈命を投げ出すことをためらうものはただの一人もいない〉」が、マーヤもまた、戦いの決断をした女王を前にして、「〈わたくしは、女王さまのために死にたく存じます〉」(161) と言う。一方、スズメバチの軍勢は、「むかしから戦いなれた盗賊の一族」(167) でありながらも、マーヤの知らせによって準備を整えたミツバチの「むかしから折紙つきの、おそるべき戦術」(168) の前に屈服せざるを得ない。「捕虜にしてはならぬ」とは「殺してしまえ」ということだが、ミツバチを襲ったスズメバチの 40 名の兵士のうち、巣に侵入した 21 名は「〈ことごとく戦死した〉」(170) のであった。

第二は、勤勉に働く「善い民族」であるミツバチが、略奪的で力に勝る「悪い民族」であるスズメバチに襲われるという場面設定である。そこには、第一次世界大戦前夜のヨーロッパの政治状況、とりわけドイツが英・仏・露の協商三国に脅かされているという当時のドイツで支配的であったメンタリティーが反映されていると考えられる。『ミツバチ・マーヤの冒険』において、ミツバチとスズメバチはきわめて対照的な存在である。ミツバチは「〈一致していて忠実〉」であり、「〈一人一人が、まず全体の幸福につかえる〉」(171) が、それは、「〈考えられないくらい遠いむかしから、正しいものと認められ〉」た「〈国のおきて〉」(11) である。また、「〈勇気があつてかしこく〉」(14)、「武装と防御の用意さえあれば優勢

17) ヴィルヘルム 2 世の言葉は、本来は Gefangene werden nicht gemacht となるべきところであろうが、「情け容赦は無用」(Pardon wird nicht gegeben) の後にセミコロンを挟んで続いているため、重複を避けると同時にインパクトのある表現にする目的で、werden が省略されたものと思われる。

18) Kaspar Maase: Warencharakter, Serialität und Bürgerlichkeit. *Die Biene Maja* als Klassiker deutscher Populärkultur. In: 100 Jahre Biene Maja – Vom Kinderbuch zum Kassenschlager. Hg. von Harald Weiß. Heidelberg: Universitätsverlag Winter 2014, S. 79-96, hier S. 90.

19) Ebenda.

20) Ebenda.

な敵とたたかいをまじえる力」(155)を持ち、「〈どこへ行ってもたいそう尊敬をうけている。〉」(14) スズメバチとの戦いにあたって、「〈ほかのものの幸福のために命を投げ出すことをためらうものはただの一人もおらず〉」(161),「長年の宿敵を全力をあげてむかえ討つという、燃える一念におそわれていないミツバチは、一びきもおらず」(162),「けだかい死のかくご」(167)を持ちながら、それでいて「混乱も起こらず、秩序もみだれず」、「めいめいが、自分のなすべき義務と、自分の役だちうる方法をこころえて」(162) いる。女王は「平静さと精神力」を備え、その姿勢は「みんなにかぎらないたのもしさを感じさせるものがある。」(160) 女王の「顔はやさしく、愛情にみちて輝いており」(160), 女王に対して「悪意」(14) を持つようなものはいない。そして、戦いの後にも、勝利に驕ることなく、「めいめい誇りと苦痛をじっと胸にだいて、自分の義務と仕事にいそしむ」(173) のである。このようなミツバチの特徴づけから受けるイメージは、秩序、団結、忠実、安定、勤勉、勇敢、賢明、落ち着き、愛情、思いやり、名声といった肯定的なものであろう。

他方、スズメバチは、「昆虫の世界でいちばん残酷な略奪者、殺害者」(164),「むかしから戦いなれた盗賊の一族」であり、「殺害や略奪」を「むかしから残忍な職業」(167) とする。彼らは、「ぎらぎら光る怪物」(145),「黒と黄のまだら模様の怪物」であり、「マーヤのかれこれ四倍ぐらい大きく」、「おそろしいやっこのついたものすごく大きな頭」(142) を持ち、「〈力も強く優勢〉」(171) である。また、「暗やみからのあざけりの高わらいのようにひびき」、「よろいのぶつかる、身の毛のよだつような音がまじる」、「いじのわるい大きなわらい声」(142) や、「するどいぶきみなうなり声」、「おそろしいささやきの声」(164) を持ち、「いいようもない恐怖」(145) を与える。彼らはミツバチを「〈つけねらう〉」(141),「〈いちばん強いわるい敵〉」(13),「〈死神〉」(158) であり、ある朝「〈不意打ちして〉」、「〈巣箱を残らず略奪して、できるだけ多くのものをとりこにし〉」、「〈みつばちの女王ヘレネ8世を生けどりに〉」(145) しようとする。戦争終結にあたって、「〈二度とおそってこない〉」というスズメバチの「〈約束〉」(170) は、ミツバチの女王に信じてもらえず、むしろ「〈新たなわるだくみ〉」(171) を疑われる。このようなスズメバチの特徴づけから受けるイメージは、悪、残酷、残任、恐怖、不誠実、卑怯といった否定的なものであろう。

このような意味で、『ミツバチ・マーヤの冒険』におけるミツバチとスズメバチの戦いは勧善懲悪的な構成となっており、女王の言葉の通り、「正義」はミツバチの側にある。つまり、邪悪なスズメバチが善良なミツバチに奇襲をかけようとするが、運よく事前に情報を得て準備を整えたミツバチは決死の戦いを挑み、スズメバチを撃退するのである。それにしても、この戦いに臨んで、その端緒にミツ

バチの士官が見せる次のようなヒロイズムは、いったいどこから沸き起こってくるのであろう。

ミツバチの若い士官の一人は、号令の終わるのを待ちきれませんでした。彼は、まっさきに討ってかかろうとして、まっさきに死にました。その前しばらくのあいだ、武者ぶるいしながらとび出すかまえをして立っていました。命令の最初のことが頭上にひびくと、おどり出して先頭の盗賊のつめの中にとびこみました。彼の細い、いやがうえにもとがった針は、敵の頭と胸の輪のあいだをぬって首にささりました。スズメバチがたけりくるうわめき声をあげて、からだをちぢめたので、一瞬、黄と黒のざらざら光る玉のように見えたところまでは、彼も見ていました。それから盗賊のおそろしい針が、若い士官の胸の輪をつらぬいて心臓にささりました。そして、自分と致命傷をうけた敵とが、味方の群れの中でたおれるのを彼は死にながら見ました。軍人らしい、いさましい彼の死に方は、けだかい死のかくごにとまなう強い幸福感を、みな胸にそそぎこみました。(166f.)

だが、こうした尋常ならざる死も、物語においてスズメバチがミツバチの「長年の宿敵」(162)と呼ばれていることを考慮すれば、納得がゆくものとなる。上述のようにミツバチの女王をヴィルヘルム2世と考えれば、ここでスズメバチが何をさしているかは、自ずと明らかであろう。

1871年1月18日、ヴィルヘルム1世のドイツ皇帝即位宣言式が挙行され、ドイツ帝国が成立した。²¹⁾ 1864年のデンマーク戦争、1866年の普墺戦争、および1871年の独仏戦争の勝利を経て統一されたドイツ帝国は、中央ヨーロッパにおける(半覇権)的地位を得るに至ったが、同時にプロイセン＝ドイツの軍国主義に対する畏怖をもたらしたため、ドイツ帝国にとって、帝国に敵対する同盟が結ばれることが主たる危険となった。そこで、宰相ビスマルクは、ヨーロッパの安定と平和を保障することをドイツ帝国が生き延びるための条件とする外交政策をとったが、

21) ドイツ帝国の歴史や国家的祝祭日・記念碑等については、次の文献を参考にした。ヴォルフ・ガング・イエーガー／クリスティーネ・カイツ編著、中尾光延監訳、小倉正宏／永末和子訳『ドイツの歴史【現代史】——ドイツ高校歴史教科書』(明石書店) 2006年、103～143頁；望田幸男／三宅正樹編『概説ドイツ史』(有斐閣) 1982年、149～157頁；森井裕一編著『ドイツの歴史を知るための50章』(明石書店) 2016年、183～208頁；木谷勤「〈一八一三年—一八一三年〉——解放戦争百周年記念式典をめぐる国家と国民」(『名古屋大学文学部研究論集史学』第38巻、1992年、325～344頁)；宮田眞治／畠山寛／濱中春編著『ドイツ文化 55のキーワード』(ミネルヴァ書房) 2015年、92～95頁；河合まゆみ「ヴィルデンプルッフの祝典劇『ヴィレハルム』」(愛知大学語学教育研究室紀要「言語と文化」第66巻・第39号、2018年、55～71頁)。

その重要な柱の一つが、ドイツへの復讐の念に燃えていたフランスの国際的孤立をはかることであった。

ところが、ヴィルヘルム1世の没後、1888年に即位し、親政を執り行った若きヴィルヘルム2世は、社会主義者鎮圧法の扱いをめぐる1890年にビスマルクが辞任した後、オーストリア＝ハンガリーとの関係を重視して、1890年6月に露独再保証条約の延長をせず、同条約が失効した結果、ロシアとフランスの接近を招き、1894年には露仏同盟が締結された。また、世界覇権政策によって周辺諸国に警戒感を呼び覚まし、とりわけ艦隊拡張による海軍力の強化を通じて、イギリスの不信を招いた。こうして、1904年には英仏協商、1907年には英露協商が締結されて、ドイツを囲むように英仏露の同盟関係が成立した。つまり、フランスを孤立させるというビスマルクの同盟システムは破綻し、フランス＝ロシア＝イギリスの三国協商というドイツに対する敵対的提携が現実のものとなった。すでに第一次モロッコ危機を解決するために開かれた1906年のアルヘシラス会議以後、国際的孤立感を深めていたドイツは、三国協商の成立によって、包囲の重圧を痛切に意識することになったのであった。こうした状況をミツバチとスズメバチの戦いに当てはめ、ミツバチの女王をヴィルヘルム2世と考えるなら、善良なミツバチはドイツであり、邪悪なスズメバチは三国協商の国々、とりわけフランスにほかならないのである。

ところで、このような外交的状況の暗示が第一次世界大戦から戦中にかけての読者に対して効果を発揮した背景には、ドイツ帝国においてビスマルクの時代から、愛国心の昂揚をはかり国民の統合強化をはかるうえで、国家的祝祭日の行事やこれと結びついた記念碑の建設が利用されたことがある。とりわけ9月2日のセダン戦勝記念日と10月18日の諸国民戦争記念日という二つの対フランス戦争の記念日は盛大に催され、対独復讐を叫ぶフランスの脅威と戦争の危機が声高に叫ばれた。また、この関連で示唆に富むのは、1897年のヴィルヘルム1世生誕100周年祭のために、ヴィルヘルム2世がエルンスト・フォン・ヴィルデンプルッフに書かせ、ベルリンの王立劇場で上演された祝典劇『ヴィレハルム』である。²²⁾ 主な登場人物は、ヴィルヘルム1世を表すヴィレハルム、ドイツの魂を表す乙女、およびナポレオン1世と3世が混ぜ込まれた皇帝である。ごく簡潔に粗筋を述べれば、第1幕では、1812年のナポレオン遠征の時代に、皇帝がゲルマン人に勝利し、乙女を幽閉する。皇帝は、ドイツ軍を引き連れて乙女を救いにくることを誓う少年ヴィレハルムをも捉えようとするが、彼はライン川が起こした奇跡によって現われた白馬に乗って逃れる。第2幕では、時代は帝国成立前の1870年に移り、

22) 『ヴィレハルム』については、河合まゆみ、上掲論文を参照。

ドイツの山峡から白馬に乗ってゲルマン戦士の姿で現れたヴィレハルムが、自分が死においやった無数の人々の呪いと復讐を恐れる老いた皇帝を倒して、以前のまま若く美しい乙女を救い、「正義をもたらす者」、「ドイツの再興者」と称えられる。ここで興味深いのは、ヴィレハルムがテューリンゲンを思わせる場所で最後を迎えることにより、キュフホイザーのバルバロッサ伝説が暗示されていることである。つまり、ヴィルヘルム2世は、この劇において、帝国再興の日までキュフホイザーの山の洞窟に眠る赤ひげのフリードリヒ1世と帝国再興を実現した白ひげのヴィルヘルム1世とを関連づけることで、神聖ローマ帝国とドイツ帝国の連続性を立証するとともに、皇帝ヴィルヘルム1世を帝国創設の立役者として称えようとしたのである。それは丁度、ヴィルヘルム2世が膨大な資金とエネルギーを投じて建設させた数々の記念碑の一つであり、この劇の上演の前年に落成した「キュフホイザー・ヴィルヘルム皇帝記念碑」を連想させる。そこではまさに、下部に目覚めたばかりのバルバロッサが彫られ、上部にヴィルヘルム1世の騎馬像が置かれているのである。こうしたヴィルヘルム2世によるヴィルヘルム1世の神話化に、辞職後のビスマルクの神話化への対抗という側面があったにせよ、この劇においても、フランスが仇敵とみなされ、ドイツ帝国の成立がフランスに対する勝利の上に成り立っているという認識に変わりはない。ドイツ帝国時代全体を通じて盛んになされた愛国主義的政策によってこうした思考パターンに慣らされたドイツの読者が、第一次世界大戦前夜から大戦中にかけて、ミツバチとスズメバチの戦いの場面を当時のドイツとフランスの関係を重ねて読んだとしても、決して不思議なことではあるまい。そして、このように見たとき、上にあげたようなミツバチの士官のヒロイズムが、ヴィルヘルム期のドイツ人の愛国主義的なメンタリティーを反映していることも納得が行くと同時に、この物語が第一次世界大戦中にベストセラーとなった理由は、「平和なミツバチの巣を政治的ユートピアの模範として選び、平和を愛する勤勉なその民族を強欲なスズメバチに襲わせるというボンゼルスに着想にある」²³⁾といった指摘も理解できるものとなる。こうした意味で、この物語は、「第一次世界大戦前のドイツ国家的な時代精神に即しており」²⁴⁾、ミツバチとスズメバチの戦いは、独仏戦争における「勝利に満ちた戦いの英雄的記憶」²⁵⁾であると同時に、差し迫ったフランスとの新たな戦いにおける勝

23) Bernhard Viel: Der Honigsammler: Waldemar Bonsels, Vater der Biene Maja: eine Biografie. Berlin: Matthes & Seitz 2016, S. 143f. Dazu vgl. auch Martin Loiperdinger: Waldemar Bonsels' „Schlacht der Bienen und Hornissen“. Vom ‚einig Volk‘ im Buch zur Weltkriegsrevanche im Kino. In: 100 Jahre Biene Maja – Vom Kinderbuch zum Kassenschlager. A. a. O., S. 97-108, hier S. 98f.

24) Martin Loiperdinger: A. a. O., S. 98.

25) Bernhard Viel: A. a. O., S. 138.

利の先取りにはかならないのである。

第三は、生物学的にはヒエラルヒーのないミツバチの生態に反して、女王を君主、働きバチを臣下とみなす通俗的な考え方が適用され、昆虫の本能的な行動が、君主的な国家観を擁護し、国家への個人の服従を説くために濫用されていると考えられることである。ミツバチの社会は、女王バチが君臨し、働きバチが一切の世話をするというヒエラルヒーの社会としてイメージされがちであるが、それは「女王」という表現に基づく誤解に過ぎず、実際には女王バチがリーダーシップを発揮して群れを統率している社会ではない。女王バチは、例えば脳の容積をとっても働きバチよりも小さく、目も働きバチの半分ほどの大きさでしかない。²⁶⁾ また、巣の外に出ることもほとんどないため、外を飛ぶ能力もさほど発達していない。そもそも、女王バチの足には花粉を集める構造もなく、蜜を貯めるための胃も痕跡的なものがある程度である。つまり、女王バチは決して単独で一から巣作りを行うことのできるようなハチではなく、ミツバチの社会を支えているのは、むしろ働きバチの能力の高さだとも言えるのである。こうした女王バチと働きバチの関係について、自ら養蜂家でもあったモーリス・メーテルリンクは、次のように述べている。

女王蜂の役割と立場を要約するなら、彼女は街の心臓であるが同時に奴隷でもあり、そのまわりを働蜂が街の知性となっておりかこんでいるというふうに定義することができるだろう。彼女は唯一の支配者であるが、同時に女中でもある。また愛の囚われの受請い人であると同時に、その愛の責任ある代理人でもあるのだ。民衆は女王に仕え、彼女を尊敬するが自分たちが女王蜂そのものに従属しているわけではなく、彼女が果たしている使命に、彼女が代表している運命に従属していることを、けっして忘れたりはいしない。²⁷⁾

つまり、ミツバチの社会は、「非の打ちどころのない合理的な独立心」と「完全周到な服従心」とが同時に存在する「民主政治」²⁸⁾である。女王バチは決して人間的な意味での女王でもなければ、命令を下すこともなく、「巣の精神」²⁹⁾とも呼ぶべき賢明な一つの力に、一介の臣下と同じように使っているに過ぎないのである。

26) ミツバチの生態については、次の文献を参考にした。中村純「そこが知りたい! ミツバチ 不思議百科」(ヤクルト本社「ヘルシスト」)217号、2013年、2～9頁);モーリス・メーテルリンク(山下知夫/橋本綱訳)『蜜蜂の生活』(工作舎)1981年。

27) モーリス・メーテルリンク、上掲書、80頁。

28) 同上。

29) 同上、31頁。

したがって、もし仮にこの社会を「過酷で絶対的な犠牲を強いる政治体制」³⁰⁾とみなすとしても、それもまた働きバチと女王バチに同等に当てはまる。メーテルリンクは言う。

生活などというものは、多かれ少なかれ楽しい時間の連続である、暗く苦い思いを味わうのは種の維持に必要なときだけにしておくのが賢明なやり方であるとする考え方は、この点に関する人間的現実がどうであれ、蜜蜂の巣においては通用しない。そこでは生活は世界の始まり以来けっしてたどりつくことのできない未来のために、厳格に共有分割されるひとつのたいなる義務と考えられている。そして各自はそこで、幸福と権利のなかば以上をあきらめなければならないのだ。女王蜂は昼の光や花々の夢、そして自由に別れを告げる。働蜂のほうは、愛と四、五年の寿命、それに母となる欲びを断念する。女王蜂は生殖器官のために、脳の機能がほとんどゼロになってしまう。逆に働蜂においては、同じ生殖器官が知性の犠牲となって衰弱する。³¹⁾

このように見れば、『ミツバチ・マーヤの冒険』における女王と働きバチの関係が、ミツバチの本来の生態とほとんど一致しないことがわかっていく。³²⁾ 確かに、自然界においてもスズメバチがミツバチの巣を襲い、それに対してミツバチが集団で抵抗することはあるが、そこに女王バチが関与する余地はない。女王バチは命令することもなければ、戦いに加勢することもできないのである。また、スズメバチにしても、ミツバチを襲うのは本能的な行動に過ぎず、人間のように悪意を持って行うわけではなく、逆にミツバチの側に正義があるというわけでもない。したがって、ここでは、「女王」という言葉から生じる誤解が意図的に利用され、女王バチが人間社会の君主に置き換えられているのである。こうして、ミツバチを正義、スズメバチを悪とし、ミツバチの女王の命令一下、働きバチが命をかけて戦うという構図もまた、この物語におけるミツバチとスズメバチの戦いを、これまで見てきたような、第一次世界大戦前夜の社会情勢を背景としたヴィルヘルム2世による治世の擁護とみなす解釈を支持する。すなわち、ヘレネ8世が「〈永遠の正義の名において、女王の名において、王国を守れ!〉」(166)と命じるとき、彼女は女王バチの姿を借りたヴィルヘルム2世にほかならないのである。

30) 同上、80頁。

31) 同上、81頁。

32) Dazu vgl. auch Karl Daumer: *Die Biene Maja* aus biowissenschaftlicher Sicht. In: Waldemar Bonsels, *Karrierestrategien eines Erfolgsschriftstellers*. Hg. von Sven Hanuschek. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 2012, S. 57-66, hier S. 63-65.

4. 非愛国主義的解釈の可能性

以上のような愛国主義的な解釈は、ミツパチとスズメパチの戦いの場面に限って見れば、一見納得がいくように思われるかもしれない。だが、作品全体の多彩な内容に鑑みれば単純化・矮小化とみなさざるを得ず、また、本作品の需要が急増したのが、戦争の長期化によって厭戦気分も高まり、ドイツの戦況も悪化した時期であったことや、後に戦争の悲惨さを描いた『西部戦線異状なし』のような著作が多数のドイツ人の共感を得たことなどを考慮すれば、前線兵士の間で本作品の人氣が急騰した理由をこうした愛国主義的な解釈の可能性のみに帰することは、的を射ているとは言い切れないと思われる。

1914年8月の開戦時、この〈大いなる戦争〉は歓呼して受けとめられた。だが、それは瞬く間に、ロマン主義的な戦争観をはるかに超えた残酷無残なものへと展開して行った。第一次世界大戦に加わったすべての国家と民族は、この戦争を生存を賭けた生き残り戦争と感じた。ドイツ帝国にとっては、それは世界的列強の地位獲得への出発点として、ヨーロッパにおける有無を言わせぬ覇権の獲得を意味し、対ドイツ連合は、ドイツ帝国のヨーロッパ列強としての地位を永久に破壊することを望んでいた。したがって、敵国民を全面的に屈服させることが、戦争遂行の唯一の目的となったのである。そこでは、砲撃隊、機関銃、巡洋戦艦、潜水艦、戦車、爆撃機、それに毒ガスといった最新兵器が投入されて、想像を超える破壊と消耗がもたらされた。また、前線と〈国内戦線〉における両面の戦いのために、軍事領域と市民領域の境界は不確かなものとなり、国民を総動員する全面戦争となった。そして、短期間のうちに終結すると期待されていた戦争が見通しのつかない長い戦争へと変化していくにつれて、戦争参加国すべてにおいて、戦争プロパガンダによる〈戦争遂行の意志〉の強化がはかられ、それは法外で狂信的な団結力を発展させた一方で、諸民族間の溝をよりいっそう深めたのであった。

文明や人間性へのはなはだしい不信を招いたこの長期間にわたる悲劇的な戦いの結果、1918年10月の時点で、ドイツは疲弊しきっており、もはや敗戦は決定的であった。それでもなお軍部はドイツに有利な条件の講和締結に拘り、そのために軍事行動が続けられていた。しかし、戦争士気の低下は著しく、それがドイツ帝国を内部崩壊に至らしめた。つまり、10月末以降のキール軍港の水兵反乱が、またたく間に全国に飛び火したのである。その結果、11月に新首相マックス・フォン・バーデンによる皇帝退位宣言が、そしてフィリップ・シャイデマンによる共和国宣言がなされ、長くそして激しく燃え続けた第一次世界大戦は急速に鎮火へと向かい、11月11日に休戦を迎えた。そして、1919年6月、ヴェルサイユ宮殿で対ドイツ講和条約が調印され、その後の諸条約により、大戦は公式に終わったのであった。

こうした第一次世界大戦の経過を考慮したとき、1918年の段階において、ミツバチとスズメバチの戦いにおける愛国主義的な側面が前線兵士の心を強く捉えたとは考えにくい。また、そもそもこうした第一次世界大戦との関連を別としても、『ミツバチ・マーヤの冒険』という物語全体を見れば、一面的な愛国主義的解釈が単純化・矮小化に過ぎないことは明らかである。例えば、マーヤは、とんぼのシュヌックに捕まったくろばえのハンス・クリストフを救おうとして、「くろばえをすぐはなしてやってください」と「われをわすれて大声で叫ぶ」(31)。また、シュヌックから人間に捕まったかえるの死の様子を聞いたとき、それを「かわいそう」(39) だと思う。シュヌックは憤慨し、「かえるを気のどくがるなんて、自分の羽を切るようなものよ」と言うが、マーヤは、「でも、わたし、だれかが苦しんでいるのを見ると、とてもつらくなるの」(39) と答える。あるいは、こおろぎのイッフィーを失って涙ぐむまぐそこがねのクルトに「心から同情」(47) し、みみずを食べながらも大つぶの涙をこぼす彼を「気のどくに思い」(48)、からだの平衡を失ってあおむけに転がってしまったのを見ると、「気のどくな思いにふるえ」、彼が起きなおるのを「いっしょうけんめい」(52) 助けてやる。そして、後にマーヤは、くもの網にかかってしまったとき、そこを通りかかったクルトに救われる。さらに、花の精は、「七夜のあいだ生きていられるけれど、生まれた花の中にずっといなければならず」、「花をはなれると、あけぼのの光の中で死ななければならない」(122) にもかかわらず、花をはなれて「最初に会おう生きものに、いちばんのぞましいねがいかなえてやることができる」という「大きな幸福」(123) を優先し、マーヤの願いを叶えて、「いちばん美しい人間」(124) の姿を見せてやり、マーヤは「人間は、愛しあっているとき、いちばん美しいのだ」(132) ということを知る。

このように、弱い者や困っている者に同情したり、お互いに助け合ったり、他者の幸せを優先する態度や、愛し合う幸せな人間の姿は、第一次世界大戦に見られるような狂信的な愛国主義とは相容れないものであろう。もとより、自然界は弱肉強食、食うか食われるかの世界であり、敵を思いやることは自らの死を意味し得る。その意味では、マーヤの態度は自然に反しており、彼女もまたヘレネ8世とは別な意味で擬人化されている、というよりも、むしろミツバチの姿を借りた人間とみなされるべきなのである。ついでながら、巣を離れて「外の大きな世界」へ出て、「花の咲く世界を見物し」、「くろこびやおどろきを、いろいろな体験や冒険を味わい」(17) たいというマーヤの姿に、工業化の進む中で都会を離れ自然に憧れるワンダーフォーゲルや生活改良運動の影響が見られることは確かだが、³³⁾ 他方で、そもそもミツバチが一匹だけで「何週間も」(110) の冒険に出かけるという設定自体が、生物学的にはあり得ないことである。というのも、ミ

ツパチは「集団でなければ生きてゆくことができない」生き物であり、「一匹だけ隔離されると、どんなに大量の食物と適温を用意しても」、「孤独のために数日をまたずに息をひきとってしまう」³³⁾からである。その意味では、もしマーヤが単なる昆虫に過ぎないとすれば、この冒険自体がまったく成り立たないなのである。

いずれにせよ、愛国的な信条とは相容れない側面については、物語全体を通してより詳しい考察が必要であるが、ここでは、ミツパチとスズメバチの戦いの場面に限定して、上記のような愛国主義的な側面とは正反対の側面に目を向けたい。一つは死にゆくスズメバチの士官に対してマーヤが見せる慈悲の心であり、もう一つはスズメバチの指揮官が戦争終結の決断のさいに見せる文民的な理性である。

女王のはからいで休息をとっていたマーヤは、戦いが始まると目を覚ますが、疲れ切っていて加勢をすることはできない。そのとき、士官らしいスズメバチが優勢なミツパチに対して防戦する一団が彼女のそばに近づいてくる。マーヤは、やがてスズメバチがミツパチの針を受け、弱ってたおれるのを目にする。スズメバチは、最期まで戦いながら、「黙々と泣きごととも言わず」、「ゆるしをもとめることもせずに」、「盗賊らしく」(174)死ぬ。彼がたおれたとき、ミツパチたちは新たな戦いのために引き返すが、それを見たとき、マーヤの「胸は熱く激しく鼓動し」(174)、死にかかっている彼のそばにそっと近寄る。そして、彼がまだ呼吸をしているのに気がつくと、急いで「水とみつを持ってきて、死にかかっているものを、いま一度よろこばしてやろう」(174)とする。だが、彼はそれをきっぱりと拒否し、「独特な真剣さで、ほとんど悲しみをまじえず」に、「〈ほくは、死ななければならぬ〉」(174)と言う。そのとき、マーヤは、「死ななければならぬ、ということがどういうことかが、はじめてわかったような気がし」、自分がくもの網にかかって死をまちうけたときよりも、「死がずっと身近にかんじられるように」(174)思う。彼女はなお「〈なにか、してあげることができたら〉」と言って泣く」(174)が、スズメバチはもう何も答えず、もう一度目をひらいて深く呼吸をすると、息をひきとる。そのスズメバチは、半時間の後、殺された仲間とともに町の門から草の中へ投げ落とされるが、マーヤはこの短い別れによって経験したことを忘れることはない。彼女は、「敵も、自分自身と同じように生きものであること、自分と同じように、はかない命を愛していること、そして、助け手もなく、苦しい死に方をしなければならなかったことを」(175)心に刻みこむ。そして、花の精と同じように、「地上の死をとげる他の生物もやがて光にむかってよみがえる」(175)ことを信じようと願うのである。ここでマーヤがスズメバチに対

33) Vgl. Bernhard Viel: A. a. O., S. 146.

34) モーリス・メーテルリンク、上掲書、24頁。

して見せる思いやりは、キリスト教的・騎士道的な意味で「慈悲」(Barmherzigkeit) 呼ぶのが適当であろうが、³⁵⁾ フン族演説に見られるヴィルヘルム 2 世の非情な態度とは正反対である。

次に、ミツバチの巣に侵入した仲間が死に、軍勢が半分に減ったとき、スズメバチの指揮官は「はげしく苦痛にもだえながら」(169)、まだ戦っている兵隊を呼び戻し、もみの木の上に集合する。指揮官は、戦いを続けるべきか引き上げるべきか迷いながらも、種族全体が皆殺しにされる危険を悟り、「心ならずも、名誉心を傷つけられて、ぶるぶるふるえながら」(169) も、閉じ込められた者を救い出すために、ミツバチ軍に「講和の使者」(170) を送る。そして、「く捕虜になったもの」はおらず、侵入した兵士らが「くことごとく戦死した」との連絡を受けると、指揮官は「色をうしない」ながらも、「こぶしをかためて」(170) 自分の心と戦う。その結果、「復讐、とわめいている兵士たちのねがいにしたがいたい」思いや、予想外の敗北に対する「くるおいしいかり」に、「彼女の理性が勝つ」(171)。彼女は、「くいつかはわがころざしをとげる日がくる」と「歯ざりり」(171) しながら、次のように言う。

「しかし、ここでたたかうのは狂気の沙汰だ。たとえミツバチの巣箱を全滅させても、味方が一人も生きて帰らなければ、なんの役にたとう。」(中略)
「死者のひきわたしをもとめよ。われわれはひきあげる。」(171)

こうして、「一滴のみつも、一人の捕虜も」得られぬまま、「スズメバチは死者をかかえて飛び去り」、「たたかいは終わった」(172) のであった。

スズメバチの指揮官は、きわめて大きな心理的葛藤を乗り越えて、早期の戦争終結という賢明な理性的判断をくだすが、このことは、上述のように第一次世界大戦が長期化し、とりわけドイツの軍部が有利な講和条件に拘って傷を深めたのと対照的である。ここに示された「文民的理性」こそ、大戦末期に多くの人々から期待されながら、「皇帝も軍の最高指揮者も、フランスとイギリスの責任者もその能力を示せなかった」³⁶⁾ ものであろう。とりわけヴィルヘルム 2 世が国民の信頼を失ったのとは対照的である。

現実の戦争では十分に発揮されなかった、こうした崇高な人間的態度の描写こそが、ドイツが敗戦へと向かう中で過酷な状況に置かれた前線兵士の胸を打ったのではないだろうか。

35) Vgl. Bernhard Viel: A. a. O., S. 140.

36) Ebenda, S. 142.

Über die ‚Schlacht der Bienen und Hornissen‘ in der „Biene Maja und ihre Abenteuer“

—Eine Betrachtung über die Beziehung zwischen dem Krieg und dem Bestseller—

Ken-ichi TAKEOKA

Waldemar Bonsels' „Die Biene Maja und ihre Abenteuer“ (1912) ist als Jugendliteratur bekannt. Aber unerwarteterweise ist es der Erste Weltkrieg, der diesem Werk den Anlass zum Bestseller gab. Der Grund dafür ist leider noch nicht genug erläutert. So untersucht dieser Aufsatz hauptsächlich die ‚Schlacht der Bienen und Hornissen‘ und behauptet, dass der Grund nicht in den Möglichkeiten der patriotischen Interpretation, sondern in den Darstellungen der erhabenen Menschlichkeit besteht.

Zuerst wird bestätigt, dass die Auflagenhöhe dieses Werks nach 1917 merklich zunahm, und dass der Anlass dazu die Lektüre der Frontsoldaten war.

Dann werden die Möglichkeiten der patriotischen Interpretation, die als ein einflussreicher Grund für diesen sprunghaften Anstieg der Nachfrage gesehen werden kann, mit dem Schwerpunkt auf der ‚Schlacht der Bienen und Hornissen‘ betrachtet. Erstens könnte man die Bienenkönigin als die Projektion von Kaiser Wilhelm dem Zweiten ansehen. Dieser Aspekt wird vor allem in der Analogie der Worte der Königin mit der sogenannten ‚Hunnenrede‘ des Kaisers Wilhelm II. ersichtlich. Zweitens entspricht die Szenengestaltung, dass das gute, fleißige Bienenvolk von dem räuberischen, kräftemäßig überlegenen Todfeind überfallen wird, dem deutschnationalen Zeitgeist vor Beginn des Ersten Weltkriegs. Drittens wird die monarchistische Staatsanschauung dadurch verteidigt, dass populäre Gedanken über die Königin und deren Untertanen im Bienenstaat angewendet werden, obwohl die Gesellschaft der Bienen biologisch keine hierarchische Struktur hat.

Diese patriotischen Interpretationen scheinen zwar in diesen Szenen überzeugend zu sein. Aber es wäre wohl nur eine vereinfachte Bagatellisierung, wenn man die vielfältigen Inhalte des Werks vom Ganzen aus betrachten würde. Außerdem wäre es nicht immer treffend, dass man den Grund des schnellen Anstiegs der Beliebtheit unter den Frontsoldaten nur der Möglichkeit dieser patriotischen Interpretation zuschreibt, wenn man berücksichtigt, dass sich die Kriegsmüdigkeit in Deutschland nach 1917 ausbreitete, und dass Werke wie Remarques „Im Westen nichts Neues“ (1929), in denen es um das Elend des Kriegs geht, später starke Sympatien der

Deutschen erweckten. So wird zuletzt Aufmerksamkeit auf einen entgegengesetzten Aspekt in der ‚Schlacht der Bienen und Hornissen‘ gerichtet. Das heißt die Barmherzigkeit, die Maja dem sterbenden Offizier der Hornissen erweist, und die zivile Vernunft, mit der sich die Führerin der Hornissen früh für den Abschluss des Kriegs entscheidet. Es waren wohl die Darstellungen dieser im realen Krieg leider nicht gezeigten erhabenen Menschlichkeit gewesen, die einen tiefen Eindruck auf die Frontsoldaten gemacht haben. Soldaten, die sich vor der Niederlage Deutschlands in der harten und hoffnungslosen Situation befanden.